OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	構造化するバックラッシュ
Author(s)	鈴木, 彩加
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 61-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

構造化するバックラッシュ

Anita Superson & Ann Cudd (eds.), *Theorizing Backlash: Philosophical Reflections on the Resistance to Feminism*

Roman & Littlefield Publishers, Inc.,2002

鈴 木 彩 加

二〇〇二年に出版された Superson と Cudd による本書 ***Theorizing Backlash*** は、合衆国におけるフェミニズムへのバックラッシュについて論じたものである。「バックラッシュ」には反発・反動という意味があるが、本書では一九八〇年代以降の合衆国におけるフェミニズムを含む進歩的社会運動へ向けられた不当な攻撃を指している。一方、日本においてバックラッシュは「ジェンダー平等（男女共同参画、ジェンダーフリー、男女平等、フェミニズムなど）の施策がすすむことに対する組織的な攻撃（反撃、巻き返し、反動、抵抗）」（伊田二〇〇六年）と定義されており、一九九九年の男女共同参画社会基本法の制定以降に顕在化するようになった。本書が分析対象としているのはアカデミズム、特に哲学領域におけるバックラッシュであるが、日本で見られるバックラッシュを考察する際にも有意義な視点を提示していると言える。

本書の構成を見てみよう。本書は五部構成となっており、十人の論者による十二の論文から成されている。本書では①フェミニズム理論に対するバックラッシュ、②女性研究者に対するバックラッシュ、③女性教員・女子学生・社会的マイノリティに属する学生に対するバックラッシュ、という三種類のバックラッシュが扱われている。

第一部「バックラッシュの概念化」は、Cudd の論文「進歩的社会運動に対するバックラッシュの分析」から成る。

本論文で Cudd は、バックラッシュとは社会制度の変更によって

既得権を失った人々による、失った利益を再び得ようとする試みであり、その試みは事実の歪曲や曲解、根拠のないラベリングを伴ったものであると指摘している。このバックラッシュの理念型は本書所収の他の論文によっても踏襲されていることから、Cudd 論文は本書の中でも重要な位置を占めていると考えられる。

Cudd は社会の進歩と後退の観点からバックラッシュを捉えている。社会の進歩とは、ある集団に不利益を与える一方で他の集団に特権を与えるような制度を変更し、前者が被る不利益を減らすことで達成される。後者の既得権が制度の変更によって失われることは、彼ら／彼女たちが得ていた利益が不公正なものであったことから正当化され得るのだが、どのような利益が公正／不公正なものであるかについて Cudd は明確な判断基準を示しておらず、議論の余地が残されている。

第二部「フェミニズム理論へのバックラッシュ」では、フェミニズム研究に対する不公正な攻撃に関する三つの論文―Burgess-Jackson「フェミニズム哲学へのバックラッシュ」、Webb「*Whipping-Girl* としてのフェミニズム認識論」、Chamallas「フェミニズム法理論へのバックラッシュ」―が取り上げられている。

ここでは、フェミニズムへの批判とバックラッシュを区別することに成功している Burgess-Jackson 論文を詳述したい。本論文が示す基準は何がバックラッシュかを見分ける上で有効だと考えられるからだ。

Burgess-Jackson はフェミニズムに対して不公正な批判を展開する三つの学術論文に言及しながら、バックラッシュに見られる三つの形式を明らかにしている。一つ目は非寛容性である。ある研究に対して批判的検討を行う場合、その研究に対する公平性が求められる。しかし、Burgess-Jackson がここでバックラッシュとして引用する論文は論者の一面的なフェミニズム解釈を基礎としており、多様な解釈可能性に閉じられた議論を展開している点で非寛容的である。二つ目はダブルスタンダードである。フェミニズムと他の領域とで評価基準が異なり、フェミニズムに対する評価基準の方が厳しいものとなっている。三つ目はいじめである。フェミニズム研究に対する批判が非建設的なものであり、文字通りいじめの意味しかなさないような批判のことである。このような非科学的姿勢の論文が学術論文として成立しており、それらがバックラッシュを構成している点は広く問題とされるべきだと評者は考える。

社会制度や社会構造に見られる女性研究者へのバックラッシュを共通テーマとする第三部「象牙の塔からの個人的・政治的バックラッシュ」も三つの論文―Superson「ボーイズクラブへようこそ」、Willett「業績追求のために失われる育児と人間らしさ」、Maybee「個人的なものの政治化」―から構成されている。ここではバックラッシュの変質という重大な指摘を行っている Maybee 論文を詳述する。

Maybee はバックラッシュが女性や社会的マイノリティへの攻撃から、マジョリティが自身にとって有利な社会制度を維持しようとする試みへとシフトしていることを指摘し、Ann E. Cudd の「選択がもたらす抑圧」という論文を引用しながらその例として女性の経済

的不安定さを挙げている。バックラッシュ派は、女性が結婚・出産を機に離職して経済的に不安定になるのは個人の選択の結果であると主張するのだが、実際に離職を決断する際には男女の賃金格差という社会構造が大きな影響を与えている。より賃金の低い女性が離職して育児に専念する方が合理的であると考えられるからだ。このように、男女の賃金格差を内包した社会構造を維持すれば、女性を直接攻撃せずとも労働市場から女性を排除することができる。その上問題の所在が個人に帰せられているため、女性が連帯してバックラッシュに抵抗していくことも困難となる。このことから Maybee は、「The personal is political」というスローガンを掲げた第二波フェミニズムのように、個人的な問題を再度政治化することの必要性を訴えている。

女性を含む社会的マイノリティに対する学生のバックラッシュを扱った第四部「学生からのバックラッシュ」は、Moeller「マージナルな声」、Carse & DeBruin「抵抗の変形」、Superson「教室の中の性差別」という三本の論文から構成されている。フェミニズムは多くの大学でカリキュラムに組み入れられているものの、近年学生からのバックラッシュがフェミニズム研究者を悩ませている。ここでは、人種的・性的マイノリティといった社会の傍流に位置する人々の視点に立つことを強く拒む学生を分析している Moeller 論文について詳述したい。

Moeller によると、バックラッシュを行っている学生は社会的マジョリティとしての自己の特権性に無自覚であり、女性や社会的マイノリティの視点から授業が行われると、「p.c.(ポリティカル・コレクト)」を武器に抵抗するのだという。「p.c.」とは従来差別的な観点を含む発言内容を回避するために使われてきたが、Moeller によれば合衆国では既に八〇年代後半から、社会問題を議論の場に持ち込もうとする人々に対して投げかけられるあざけりの言葉として主に保守派によって使われ始めていたという。今日のバックラッシュを行っている学生も「p.c.」をこのような意味で使用しているのである。

Moeller は学生のバックラッシュを強化する要因としてメディアの影響を指摘する。まず、メディアはマイノリティの中でも社会的に成功している一部の人々を取り上げることで、その集団全体が社会的に恵まれているかのようなイメージを視聴者に与えている。そして、マイノリティの主張を報道したとしても、視聴者はただの「傍観者」というスタイルを取り、社会的不平等の問題から距離を置いてしまうのである。Moeller は最後に、バックラッシュに対抗するためには授業内での自由な発言を確保し、批判的な思考を育てることが重要であるという主張で、本論文を終わらせている。

第五部「進歩はどこに?」では、女性を巡る社会状況は進歩したのか否かという問題が検討されている。第五部は Cudd「言論の自由として正当化されるセクシュアル・ハラスメント」、Bell「哲学における女性」、の二つの論文から構成されているが、ここでは自身が長年アカデミズム内で直面してきた性差別とバックラッシュを回顧する Bell 論文を取り上げたい。

Bell がまだ大学院生であった六〇年代に存在していたのは、バッ

クラッシュではなく性差別であった。Bell が言う性差別とは、研究職の門戸が女性に対して閉ざされていたこと、そしてミソジニーが露骨に示されていたことを指している。当時と今日の状況を比較し、Bell は三つの変化を述べている。まず、女性に対する攻撃がより暴力的になっている一方で、ミソジニーが表面には現れなくなったこと。次に、多くの大学でアファーマティブ・アクションが導入されるに至ったものの大半がトークニズムに過ぎず、むしろアファーマティブ・アクションがバックラッシュ派の非難の的になっていること。そして最後が、未だに存在するという女性研究者に向けられる「良き娘であれ」というアドバイスが今日ではバックラッシュを助長していることである。このアドバイスは社会システムの生み出す不公正に抵抗しないよう女性に求めるものであるが、このことが現状を肯定し、進歩を妨げる要因になっているのだと Bell は批判している。

以上が本書の概観である。

本書が評価されうる点として、三点を挙げることができるだろう。

まず一点目は、バックラッシュが構造的なものへと変質していることを明らかにした点である。

バックラッシュを分析したものとしてよく知られている、スーザン・ファルーディ『バックラッシュ―逆襲される女たち』は、一九八〇年代の合衆国におけるフェミニズム及び女性に対するバックラッシュを膨大な資料に基づいてまとめたものである。ファルーディが分析対象としているのは、マスメディア・映画・ファッション・美容といった大衆文化、政治的なレトリックにおけるバックラッシュである。当時はフェミニズムや女性を攻撃する意図を明確に持った人々による攻撃であったが、このバックラッシュが彼らにとって都合のよい社会制度や構造に基づいて権力を維持する試みへと移行していることは特に Maybee 論文によって指摘された点である。バックラッシュを一見中立的に見える社会制度や社会構造のレベルで捉えることの必要性は、本書が提起する重要な視点であろう。

二点目は、バックラッシュを理論的に分析し、概念化している点である。そのため、Burgess-Jackson 論文でなされたように、フェミニズムに対する批判とバックラッシュを区別することを可能にしている。このことは Bell らが指摘するように、バックラッシュが性差別やミソジニーを露骨には示さなくなった今日、バックラッシュとバックラッシュではないものを見分ける一つの基準となる。さらにこのように理念化・概念化することによって、個別事例への対応だけでなく、本書では扱われていないバックラッシュ、また今後生じるであろうバックラッシュにも対応していくことが可能になると考えられる。

三点目は、本書がフェミニズムや女性に対するバックラッシュのみならず、社会から周辺化されたあらゆる社会的弱者に対するバックラッシュをも視野に入れている点である。前述した Maybee 論文では、現在の社会制度は決して中立的なものではなく、「白人・男性」中心主義的であることも指摘されている。女性だけではなく、エス

ニック・マイノリティや同性愛者、セクシュアル・マイノリティ、障がい者といった社会的弱者もこのような制度によって抑圧され得る。また、Cudd 論文で提示されたバックラッシュ概念も、これらの社会的弱者を巡る問題を考える際に適用可能であるし、Moeller 論文でも学生によるバックラッシュが、フェミニズムに対してのみ見られるものではなく、アフリカ系アメリカ人や同性愛者などにも該当することが述べられている。このように本書は、フェミニズム対バックラッシュという二項対立構図を越えて、社会制度や社会構造の中立性・普遍性を問題化することで様々な領域に開かれた議論を展開することに成功していると言える。

最後に、本書で明らかにされたバックラッシュの構造的なものへの変質という観点から、日本のバックラッシュを考察する際の今後の課題を検討したい。

日本における今日のバックラッシュの状況について、評者が疑問とする点がある。それは、これまでバックラッシュを牽引してきた『正論』などの保守系メディアにおいて、二〇〇七年以降男女共同参画やジェンダーフリー批判を展開する論文の掲載数が、著しく減ったことだ。ピーク時には年間で計十五本近く掲載されていたのだが、〇七年・〇八年は掲載数がほぼゼロとなっている。果たしてこのことは、バックラッシュの沈静化と言えるのだろうか。

言説レベルでのバックラッシュの減少には、男女共同参画社会基本法の運用をめぐる変化が影響していると考えられる。二〇〇五年には「ジェンダー」用語の定義が、従来の「社会的・文化的に形成された性別」という定義から「社会的性別」へと変更された。さらに二〇〇六年には、内閣府より「事務連絡『ジェンダー・フリー』について」という通知が地方自治体に対してなされ、ジェンダー・フリーの用語使用が禁止されるに至った。これらの変更により、当初、固定的な性別役割分業と既存のジェンダー秩序の見直しを趣旨とした男女共同参画は、バックラッシュ派によってなし崩しにされつつある。先ほどの論文の掲載数の減少は、フェミニストや男女共同参画を直接攻撃しなくても、彼らの望むような社会制度が維持され得るようになってしまったことを意味しているのではないだろうか。

このような状況においては、本書の議論が明らかにしたように、女性を含めた社会的マイノリティに対する目に見える攻撃のみをバックラッシュと考えるのではなく、社会制度や社会システムなどの構造レベルでも捉えていくことが必要となる。〇五年から〇六年における男女共同参画の運用をめぐる攻防のピークが過ぎた今日、バックラッシュのみならず、男女共同参画をも批判的に検討しなければならないだろう。

〈参考文献〉

伊田広行「バックラッシュの背景をさぐる」日本女性学会ジェンダーフリー・バッシング研究会編『Q&A 男女共同参画/ジェンダーフリー・バッシング―バックラッシュへの徹底反論』（二〇〇六年、

明石書店）

スーザン・ファルーディ著、伊藤由紀子ほか訳『バックラッシュ―逆襲される女たち』（一九九四年、新潮社）